

パウロにおける愛の教説

原 口 尚 彰

1. はじめに
2. 語学的考察
3. 神の義と信実と愛
4. 信仰・希望・愛
5. 隣人愛と愛敵
6. 兄弟愛と友愛
7. まとめと展望

1. はじめに

使徒パウロの神学思想の聖書学的研究において愛の主題は、主としてパウロの倫理教説の一部として取り扱われ、隣人愛の教えを中心として論じられてきた¹。主要な真正パウロ書簡であるローマ書やガラテヤ書の後半部には、旧約聖書の律法の要約として隣人愛の戒めを引用して、パウロが受信人達に他者を愛することを勧める部分が存在しているので（ロマ12:8-10；ガラ5:13-14）、このような傾向に理由がない訳ではない。しかし、パウロは人間の愛についてだけでなく、神の愛やキリストの愛についても重要な主題として言及しており（ロマ5:5, 8；8:35, 39；Ⅱコリ13:13；ガラ2:20を参照）、隣人愛の教えだけでパウロの愛の教説が尽きるのではない。パウロの神学思想において、神の愛は人間の愛に先行するものであり、神の愛への応答として人間の愛ははじめて可能となる。神の愛やキリストの愛について考察することを抜きにパウロの愛の教説を論じることは出来ない。

本研究は、真正パウロ書簡に表現されたパウロの愛の教説について、釈義的・神学的考察を系統的に行って全体像を得ることを目的としている。まず、予備的考察として愛を表現する言葉の主要な用例についての語学的分析を行い、次に、パウロ書簡中の関連箇所について釈義的・神学的分析を行って、神の愛と信徒の愛についてパウロがどのように考え、表現していたかを検討する。特に、パウロの神学的思考の中で、愛の教説の占める位置と意義を明らかにしたい。

1 R. Bultmann, "Das christliche Gebot der Nächstenliebe," in *Glauben und Verstehen* (4 Bde; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1933-1965) I 229-244; 辻学『隣人愛のはじまり』新教出版社、2010年、79-102頁；T. Söding, *Das Liebesgebot bei Paulus* (Münster: Aschendorff, 1995); idem., *Nächstenliebe. Gottes Verheissung und Anspruch* (Freiburg i.B.: Herder, 2015) 243-313; M. Konradt, "Liebesgebot und Christismimesis. Eine Skizze zur Pluralität neutestamentlicher Agapeethik," *JBT* 29 (2014) 65-98; O. Wischmeyer, "Das Gebot der Nächstenliebe bei Paulus," *BZ* 30 (1986) 161-187; idem., *Liebe als Agape* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2015) を参照。

2. 語学的考察

古典ギリシア語において、愛を表す主要なギリシア語に、エロース (ἐρῶς 愛) とアガペー (ἀγάπη 愛) とフィリア (φιλία 友愛) がある。エロース (ἐρῶς 愛) は主として男女間の愛のことを言う (ソフォクレス『アンティゴネー』90; ヘロドトス『歴史』9.108他)²。しかし、プラトンら哲学者は時として自己犠牲を伴った愛や (プラトン『饗宴』179b)、善美なるものへの愛を表す言葉としても用いている (プラトン『リュシス』221e; 『饗宴』181cd; 201ab)³。古典文献においては、フィリア (φιλία 友愛) が社会生活における人間相互の愛を表す基本的語彙として好んで使用されており (ヘロドトス『歴史』7.130; プラトン『パイドロス』237c; アリストテレス『政治学』1242b; 1262b; クセノフォン『ソクラテスの思い出』2.6.29; イソクラテス『弁論集』1.33; 6.11他多数)、アガペー (ἀγάπη 愛) はあまり使用されない⁴。ところが、新約聖書ではアガペーが117回使用されているのに対して (マタ24:12; ルカ11:42; ヨハ5:42; 13:35; 15:9, 10, 13; 17:26; ロマ5:5, 8; 8:35, 39; I コリ13:1, 2, 3, 4, 8, 13他多数)、フィリアは1回しか使用されていない (ヤコ4:4)⁵。また、エロース (ἐρῶς 愛) は全く使用されていない。動詞形について言えば、新約聖書において、動詞フィレオー (φιλέω) が25回 (マタ6:5; 10:37; 23:6; 26:48; マコ14:44; ルカ20:46; 22:47; ヨハ11:3, 36; 12:25; 15:19; 16:27; 20:2; 21:15, 16, 17; I コリ16:22; テト3:15; 黙3:19; 22:15) 使用され、動詞エラオー (ἐράω 愛する) は全く使用されていないのに対して、動詞アガパオー (ἀγαπάω) は144回 (マタ5:43, 44, 46; 6:24; 19:19; マコ10:21; 12:30, 31; ルカ6:27, 32, 35; 7:5, 42; ヨハ3:16, 19, 25; 13:1, 23, 34; 15:9, 12, 17; ロマ8:28, 37; 9:13, 25; 13:8, 9他多数) 使用されている。

特に、真正パウロ書簡について言えば、名詞アガペー (ἀγάπη) は47回使用されているが (ロマ5:5, 8; 8:35, 39; 12:9; 13:10 [2回]; 14:15; 15:30; I コリ4:21; 8:1; 13:1, 2, 3, 4 [3回], 8, 13; 14:1; 16:14, 24; II コリ2:4, 8; 5:14; 6:6; 8:7, 8, 24; 13:11, 13; ガラ5:6, 13, 22; フィリ1:9, 16; 2:1, 2; I テサ1:3; 3:6, 12; 5:8, 13; フィレ1:5, 7, 9)、名詞エロース (ἐρῶς 愛) や名詞フィリア (φιλία) は一度も使用されていない。動詞形の使用については、アガパオー (ἀγαπάω) が18回 (ロマ8:28, 37; 9:13, 25; 13:8 [2回], 9; 14:15; 15:30; I コリ2:9; 8:3; II コリ9:7; 11:11; 12:15; ガラ2:20; 5:14; I テサ1:4; 4:9) 使用されているのに対して、動詞エラオー (ἐράω 愛する) は使用されず、動詞フィレオー (φιλέω) は1回 (I コリ16:22) だけしか使用されていない。新約聖書全体の用語法に一致して、パウロは愛を表す一般的な語彙として名詞アガペー (ἀγάπη) と動詞アガパオー (ἀγαπάω) を好んで用い、男女間の愛を表す名詞エロース (ἐρῶς 愛) や動詞エラオー (ἐράω 愛する)、友愛を表す名詞フィリア (φιλία)

2 LDJ 681; Söding, *Nächstenliebe*, 30.

3 Söding, *Nächstenliebe*, 31-32.

4 詳しくは、LSJ 1934; R. Joy, *Le vocabulaire chrétien de l'amour est-il original? ἀγᾶν et φιλεῖν dans le grec antique* (Bruxelles: ULB, 1968) を参照。

5 詳しくは、E. Stauffer, "ἀγαπάω κτλ.," *ThWNT* II 34-55; G. Schneider, "ἀγάπη, ἀγαπάω, ἀγαπητός," *EWNT* II 19-29; G. Stählin, "φιλέω κτλ.," *ThWNT* IX 112-144; W. Feneberg, "φιλέω," *EWNT* II 1017-1018; F. Hauck, "Die Freundschaft bei den Griechen und im neuen Testament," in *Festgabe für Theodor Zahn* (Leipzig: Deichert, 1928) 218-221; R.F. Butler, *The Meaning of agapao and phileo in the Greek New Testament* (Lawrence: Coronado, 1977) 19-57を参照。

や動詞フィレオー（φιλέω）を避ける傾向があると言える⁶。

他方、兄弟愛を表す名詞フィラデルフィア（φιλαδέλφια 兄弟愛）は、新約聖書全体で6回（ロマ12:10; Iテサ4:9; ヘブ13:1; Iペト1:22; IIペト1:7 [2回]）、真正パウロ書簡に限れば2回用いられている（ロマ12:10; Iテサ4:9）⁷。名詞フィラデルフィア（φιλαδέλφια 兄弟愛）は、フィリア（φιλία）とアデルフォス（ἀδελφός 兄弟）の複合語であるので、この名詞が友愛の要素も内包していることも見逃せない事実である。尚、ヘレニズム世界において名詞フィラデルフィア（φιλαδέλφια 兄弟愛）は、専ら、肉親の兄弟姉妹間の愛情のことを指しており、宗教団体の構成員間の愛情を指すことはなかった（プルタルコス『兄弟愛について』478-492; ルキアノス『神々との対話』26.2; エピクテトス『語録』Ⅲ3.9を参照）⁸。ヘレニズム・ユダヤ教文献においても事情は同じで、この名詞は血縁上の兄弟姉妹間の愛情について用いられた（フィロン『ガイウス』87; ヨセフス『古代誌』Ⅱ161; 4.26; 12.189; IVマカ18:23, 26; 14:1を参照）。

3. 神の義と信実と愛

パウロの神についての言説は、神が世界の創造主であり、唯一の神であるという旧約・ユダヤ教的神概念を前提としている⁹。神が世界の創造主であるということは、旧約聖書に表明されている古代イスラエルの創造信仰に遡る。旧約聖書は、神の天地創造の業を語る創世記1—2章の記述によって始まる（創1:1-2:4a; 2:4b-14）。創造信仰は、旧約聖書の詩編の中にある神の御業の讃歌や（詩8:1-10; 19:1-7; 24:1-2; 89:8-12; 104:1-35; 121:1-8; 124:8; 134:3; 136:1-9; 139:13-16; 146:6; 148:5-6; 149:2; 150:1-2）、イザヤ書後半部の第二イザヤと呼ばれる部分や（イザ40:21-31; 43:1, 15; 44:1-5, 24; 45:7-13; 48:13; 51:16; 54:5）、ヨブ記にも語られている（ヨブ33:4-6; 35:1-16）。中間時代のユダヤ教文献においても、創造主ということは真の神の概念を構成する中心的要素となっている（知13:1-9; IIマカ1:24-25; フィロン『世界の創造について』Ⅱ7-10; Ⅲ13-15）。新約時代になると、創造主なる神という観念は、異邦人に対する初代教会の伝道説教において強調された（使14:15-17; 17:24-28を参照）。パウロも宣教地における異邦人伝道において、キリストを通しての救いを語る前提として創造主なる神の存在を告知し、聴衆に信じることを勧めたと推測される。

パウロによれば、異邦人が神の業なる被造物を通して神を知る可能性は存在するが（ロマ1:19-21）、そのような自然を通しての神認識には限界があり、神への信仰へ導くことがない。真の神認識と信仰は、

6 A.J. Malherbe, *Paul and the Thessalonians* (Minneapolis: Fortress, 1989) 68-71; idem., *Paul and the Popular Philosophers* (Minneapolis: Fortress, 1989) 63; A.C. Mitchell, "Greet the Friends by Name: New Testament Evidence for the Greco-Roman *Topos* on Friendship," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J.T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 226を参照。

7 詳しい語学的分析については、LSJ 1931; Bauer-Aland, 1712; H. von Soden, "ἀδελφός κτλ.," *TWNT* I 144-46; E. Plümacher, "φιλαδέλφια κτλ.," *EWNT* III 1014-15を参照。

8 E. Plümacher, "φιλαδέλφια κτλ.," *EWNT* III 1014; K. Schäfer, *Gemeinde als Bruderschaft* (Frankfurt a.M.: P. Lang, 1990) 135-158を参照。

9 J.D.G. Dunn, *The Theology of Paul the Apostle* (Grand Rapids: Eerdmans, 1997) 2-50; N.T. Wright, *Paul and the Faithfulness of God* (4 Parts; Minneapolis: Fortress, 2013) 619-773を参照。

自然世界を眺めることによって得られるのではなく、宣教の言葉を聞くことから来る（ロマ10:14-21）。宣教の言葉は、神は天地を創られた方一人であることを語り（ロマ3:30; I コリ8:4, 6）、神々への信仰から、この生ける真の神へ回心することを勧める（I テサ1:9-10）¹⁰。パウロが「神を知る」と述べる時、それはパウロの宣教の言葉を通して回心した者たちが、信仰によって「神を知り、神に知られる」人格的關係に置かれることを意味する（ガラ4:9; I コリ8:3）¹¹。この神とはイエス・キリストを死人の中から復活させた神（ロマ4:24; 8:14; 10:9; ガラ1:4）、生ける真の神であり（I テサ1:9）、神を知る者は神を愛し（I コリ8:3）、神に「アッパ、父よ」と語り掛け（ロマ8:15; ガラ4:6）、神に栄光を帰し（ロマ15:6, 9; I コリ6:20; ガラ1:24）、神に感謝する（ロマ1:8; 7:25; I コリ1:4, 14; 14:18; I テサ1:2; 2:13; 5:18）。

パウロは、「神は唯一である」（ロマ3:30; I コリ8:4, 6）、さらに、「私たちにあって、父なる神は唯一であり、すべては神から出ており、私たちも神のために存在する」と述べる（I コリ8:6）。神の唯一性ということは、パウロと手紙の読者との間に共通な認識である。異教の神々は神ではなく人間の手が造った偶像ということになる（ロマ1:22-23; I コリ8:7-13; さらに10:28-29も参照）。「神は唯一である」という表現は、「聞け、イスラエル。主は私たちの神であり、主は唯一である」という申命記6章4節の言葉に由来する。但し、申命記は主以外の神々の実在を必ずしも否定しておらず、この言葉は十戒における他の神々を礼拝することの禁止と同様に、主のみを拝し、主のみに仕えることを求めるに留まる（出20:2-6; 申5:6-10）。イスラエルにおいて唯一神論の確立が確認されるのは、第二イザヤの時であり、この預言者は主以外の神は存在しないことを明確に述べている（イザ43:10; 45:5, 14-25; 46:9）¹²。

第二イザヤの唯一神論は初期ユダヤ教に継承され、例えば、ソロモンの知恵13章は、異教の神々は人間がその意匠に従って造った偶像であり、人を救う力を持たないことを指摘し、異邦人社会の倫理的混乱の根本原因を真の神を知らず、偶像礼拝に耽ること見て非難している。唯一神論を初代教会は、ヘレニズム・ユダヤ教を介して継承したのであった（ロマ1:18-32; 3:30; 使14:16; 17:23-30; I コリ8:4-6を参照）。

神の義

神の救済の業についての議論において、神の義と信実と愛の主題は一体をなしており、神の愛は神の義と信実において表われる。パウロにおける神の愛の主題について正しく考察するためには、神の義と信実の基本的理解についても検討しなければならない。神の義（δικαιοσύνη θεοῦ）はローマ書の中心主題を構成するのみならず、パウロ神学の核心を構成している（ロマ1:17; 3:5, 21, 22, 25, 26; 10:3; II

10 P.-G. Klumbies, *Die Rede von Gott bei Paulus in ihrem zeitgeschichtlichen Kontext* (FRLANT 155; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992).

11 A. Lindemann, "Die Rede von Gott in der paulinischen Theologie," ders., *Paulus, Apostel und Lehrer der Kirche* (Tübingen: Mohr, 1999) 17.

12 B. Lang, "Zur Entstehung des biblischen Monotheismus," *TQ* 166 (1986) 135-142; G. von Rad, *Theologie des Alten Testaments* (2 Bände; München: Kaiser, 1960-1962) II 223-225, 240; J.J. Scullion, "God in the OT," *ABD* II 1041-1048.

コリ5:21; 9:9を参照)。新約ギリシア語において神の義 (δικαιοσύνη θεοῦ) とは、神により付与される義 (マタ5:6; 6:33; ロマ9:30; 10:4; フィリ3:9)、あるいは、御心に適った義なる行い (マタ3:15; 5:10, 20; 6:1; 使10:35; ヘブ1:9; ヤコ3:18; Iヨハ3:10; 黙22:11) を意味する¹³。パウロの使用例における義 (δικαιοσύνη) は倫理的意味よりも法廷の意味が強く、神が人を義とし、神との正しい関係に置くことを意味する (ロマ1:17; 3:21, 22, 25, 26; 4:3, 5, 6, 13, 22; 9:30; 10:4, 5; IIコリ5:21)¹⁴。

キリストの福音を神の義の啓示と定義するロマ1:16-17は、ローマ書の中心主題を読者に提示する役割を果たしている¹⁵。さらに、ロマ3:21-26では神の義ということは、キリストの信実を通して与えられる新しい啓示の中心内容となっている (IIコリ5:21も参照)。パウロによれば、神の義とは、義である (δίκαιος) 神が、キリストにより人を義とする (δικαιόω) ことであり (ロマ1:17; 3:5, 21, 22, 25, 26; IIコリ5:21; フィリ3:9)、キリストが私達のために義となったのである (Iコリ1:30)。

神の信実

神が信実であるという考えはパウロの神学思考を支える重要な思想であり、名詞句において「神の信実 (πίστις τοῦ θεοῦ)」として言及される他に (ロマ3:3)、「神は信実である (πιστὸς ὁ θεός)」という定型句によって表現されている (Iコリ1:9; 10:13; IIコリ1:18; Iテサ5:24)。神の信実とは、神が救済史においてイスラエルの父祖達に約束したことを必ず成就するというに基づいている (ロマ3:3を参照)。アブラハムへの約束 (ἐπαγγελία) はキリストの福音 (εὐαγγέλιον) の先取りであり (ロマ4:1-25; ガラ3:6-22を参照)、父祖達への約束はキリストにあって実現し、然りとなった (IIコリ1:18)。神の信実は旧約聖書に由来する主題であり、パウロが神の信実を問題にする時 (ロマ3:3; Iコリ1:9; 10:13; Iテサ5:24)、その背後には旧約的な契約神学が存在している。申命記において、神はイスラエルの父祖たちに与えた契約や (申7:9; 32:4)、約束の言葉を (詩145[144]:13 LXX) 守るので、神は信実であるとされる。他方、第二イザヤは、信実の神がイスラエルを選んだことの内に、イスラエルの救いの希望の根拠を見ている (イザ49:7-9)。

パウロはIコリント書冒頭で、「キリストとの交わりへの召した神は信実である」と述べる (Iコリ1:9)¹⁶。神が信実であるのは、神がイエス・キリストの福音を通して信徒たちをキリストとの交わりに招

13 G. Schrenk, “δικαιοσύνη,” *ThWNT* II 194-214; K. Kertelge, “δικαιοσύνη,” *EWNT* I 784-796; J.A. Ziesler, *The Meaning of Righteousness in Paul* (Cambridge: Cambridge University Press, 1972) 131-136を参照。

14 E. Käsemann, *An die Römer* (HbNT 8a; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1974) 21-24; T.S. Schreiner, *Romans* (Grand Rapids: Baker, 2004) 63-65を参照。尚、M. Wolter, *Der Brief an die Römer* (EKK VI/1; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlagsgesellschaft; Ostfildern: Patmos, 2014) I 121-122のように、この名詞の背後に存在する動詞の意味 (「義とすること」) と形容詞の意味 (「義しい」) とを峻別して考える必要はない。両者の意味は相補的である。

15 J.D.G. Dunn, *Romans* (WBC 38AB; 2 vols; Dallas: Word Books, 1988) I 42; R. Jewett, *Romans* (Hermeneia; Minneapolis: Fortress, 2007) 142を参照。尚、E. Käsemann, “Gottesgerechtigkeit bei Paulus,” in idem., *Exegetische Versuche und Besinnungen* (2. Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1965) II 181-193; P. Stuhlmacher, *Gerechtigkeit Gottes bei Paulus* (2. Aufl.; FRLANT 87; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1966) 165-166は、人を支配し、従わせる力として神の義の働きを強調する。

き入れ、さらには、キリストを通して彼らを究極的救いへと召し、終わりの時にそれを実現されるからであると考えられる（Iテサ5:24; ヘブ10:23を参照）¹⁷。キリストは信徒たちの救いが実現するように、彼らを終わりの日に到るまで支えるのである（Iコリ1:8）。ここでは、救いの約束を守って実現する神の信実と、それを仲介するキリストの働きとが短く言及されている。

Iコリ10:13においてパウロは、「神は信実であり、耐えることが出来る以上の試練にあなた方を会わせることなく、試練と共に耐えることが出来る逃れの道を作って下さるであろう」と述べる。Iコリント10章前半においてパウロは、コリント教会の信徒たちの中に、異教の神々に献げられた肉を食することにより、混乱を起こしている者たちがいることを念頭に置きながら（Iコリ10:14-22）、イスラエルの歴史において出エジプトの後の荒野の世代の中に偶像礼拝の罪を犯したために滅びた者たちがある事例を、終末の時に臨んでいるキリスト教徒への警告として言及している（10:1-13）¹⁸。Iコリ10:13は、神は信徒を耐えることの出来ないような試練に会わせることのないと述べるのであるが、その根拠は救いの約束を守り、信徒に究極的な救いの希望を与える神の信実とされている¹⁹。この見方は、試練に際しても信仰を貫く信仰者の側の信実を強調する初期ユダヤ教やキリスト教文書とは極めて対照的である（シラ44:20; マカ2:52; ヘブ6:12; 11:7; 13:7; Iペト1:9; 黙2:10, 13, 19; 13:10他）²⁰。

16 Iコリ1:9の詳しい釈義的分析は、C.K. Barrett, *The First Epistle to the Corinthians* (London: Black, 1968) 39-40; R.F. Collins, *First Corinthians* (Sacra Pagina 7; Collegeville, MN: The Liturgical Press, 1999) 65-66; H. Conzelmann, *Der erste Brief an die Korinther* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1981) 47; G.D. Fee, *The First Epistle to the Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1987) 44-47; D. Garland, *1 Corinthians* (Grand Rapids: Baker, 2003) 363-377; H.J. Klauck, *Der erste Brief an die Korinther* (2. Aufl.; Würzburg: Echter Verlag, 1987) 60-61; F. Lang, *Die Briefe an die Korinther* (NTD 7; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1986) 18-19; H. Lietzmann, *Der erste Brief an die Korinther I/II* (HbNT 9; 5. Aufl.; Tübingen: J.C.B. Mohr, 1969) 5-6; H. Merklein, *Der erste Brief an die Korinther* (OTKNT 7/1-2; 2 Bände.; Gütersloh: G. Mohn, 1992-2000) I 93-94; A. Robertson, and A. Plummer, *A Critical and Exegetical Commentary on the First Epistle to the Corinthians* (Edinburgh: T. & T. Clark, 1911) 8; W. Schrage, *Der erste Brief an die Korinther* (EKK 7/1-4; 4 Bände; Zürich-Braunschweig: Benzinger Verlag; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1991-2002) I 123-124; A. Strobel, *Der erste Brief an die Korinther* (ZBK6.1; Zürich: Theologischer Verlag, 1989) 32; A.C. Thiselton, *The First Epistle to the Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 2000) 103-105; B. Witherington III, *Conflict & Community in Corinth: A Socio-Rhetorical Commentary on 1 and 2 Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1995) 82-93; C. Wolff, *Der erste Brief an die Korinther* (ThHKNT 7; Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1996) 23; Fee, 44-47を参照。

17 拙稿「パウロにおける πιστὸς ὁ θεός/πίστις τοῦ θεοῦ」『パウロの宣教』教文館、1998年206-207頁を参照。

18 Iコリ10:1-13の詳しい釈義的分析は、Barrett, 218-229; Collins, 363-374; Conzelmann, 201-208; Fee, 441-462; Garland, 438-471; Klauck, 70-73; Kremer; Lang, 108-111; Lietzmann, 44-47; Merklein, II 183-192; Robertson and Plummer, 198-210; Schrage, II. 380-429; Strobel, 152-157; Thiselton, 719-749; Witherington III, 217-224; Wolff, 208-225を参照。

19 拙稿「パウロにおける πιστὸς ὁ θεός/πίστις τοῦ θεοῦ」『パウロの宣教』教文館、1998年、207-208頁を参照。

20 同208頁を参照。

神の愛

神の愛は神の義や信実と並ぶローマ書の重要主題であり、義認論に基づいて終末時の救いの希望を語る根拠として言及されている（ロマ5:5, 8; 8:35, 39; II コリ13:13; ガラ2:20を参照）。旧約聖書において神の愛の主題を集中的に採り上げるのは申命記である。この文書は、主（ヤハウェ）が族長達を愛し、諸国民の中からイスラエルを選んで契約を結び、神の民としたという行為の中に神の愛の表れを見る（申4:37; 7:8; 10:15; 詩47:5）。神の愛を受けて神の民とされたイスラエルは、排他的な関係に置かれており、他の神々を礼拝することを避け、唯一の神ヤハウェだけを全身全霊を持って愛し、その戒めを守ることが求められている（申6:4; 11:1）。主を愛する者に対して、神は契約を守って慈しみ与えるのである（5:10; 7:9; 19:9）。他方、神の愛と義の主題は、詩編において採り上げられ、神は義なる方であり、義を愛し（詩11[10]:7）、義人を愛すると述べられている（146[145]:8）²¹。

パウロが愛について考察するときは、旧約聖書と同様に神の愛を主発点にしている。例えば、「神の愛（ἀγάπη τοῦ θεοῦ）」という名詞句を用いるとき、パウロは「神への愛」ではなく、「神が愛する愛」のことを考えている（ロマ5:5, 8; 8:35, 37, 39; II コリ13:13; ガラ2:20を参照）²²。他方、ロマ8:28; I コリ2:9; 8:3において、彼は人が神を愛することについて言及している。パウロは神を愛することを勧める申命記の戒め（申6:4; 11:1）を明示的に引用することがないが、神の愛への応答として人が神を愛することを、彼は神との人格的な関係に置かれたことの当然の結果として前提している²³。人が神を愛することが出来るのは、神によって知られており、人格的な関係に置かれていることの結果である（I コリ8:3）。「神を愛する者達」は、神の「計画に従って召された者達」であり、「万事は益となるように」定められている（ロマ8:28）。

パウロによると、神の愛は神が自らイニシアティブを取って、御子イエスをこの世に下し、死に渡したところに表れている（ロマ5:8; 8:32, 39）²⁴。神が人間に恵みを与える内的動機が愛である。同様に、「キリストの愛（ἀγάπη τοῦ Χριστοῦ）」という句も（II コリ5:14）、「キリストを愛する愛」ではなく、「キリストが愛する愛」を指している（ロマ5:6-8; 8:34-35を参照）²⁵。キリストの自己犠牲的な救いの業の

21 Söding, *Nächstenliebe*, 47を参照。

22 C.E.B. Cranfield, *The Epistle to the Romans* (ICC; 2 vols; Edinburgh: T & T Clark, 1973-1979) I 262;; O. Wischmeyer, "Traditionsgeschichtliche Untersuchung der paulinischen Aussagen über die Liebe," *ZNW* 74 (1983) 234-235; J.D.G. Dunn, *Romans* (WBC 38AB; 2 vols; Dallas: Word Books, 1988) I 252; J.A. Fitzmyer, *Romans* (AB33; New York: Doubleday, 1993) 398; R. Jewett, *Romans* (Hermeneia; Minneapolis: Fortress, 2007) 356; E. Käsemann, *An die Römer* (HbNT 8a; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1974) 125-126; E. Lohse, *Der Brief an die Römer* (KEK VI/1; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2003) 169; H. Schlier, *Der Römerbrief* (HThkNT VI; 3. Aufl.; Freiburg: Herder, 1987) 150; U. Wilckens, *Der Brief an die Römer* (EKK VI/1; 2. verbesserte Aufl.; Zürich: Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1987) I 293-294; 原口尚彰『新約聖書神学概説』教文館、2009年、62頁を参照。

23 C. Spicq, *Agape in the New Testament* (3vols; Eugene, OR: Wipf & Stock, 2007) II 23-26, 49-51; T. Söding, "Gottesliebe bei Paulus," in idem., *Das Wort vom Kreuz* (WUNT 93; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1977) 303-326を参照。

24 Spicq, II 22, 35; V. Furnish, *The Love Command in the New Testament* (Nashville, TN: Abingdon, 1972) 92-93を参照。

内的動機がキリストの愛である（ロマ8:35）。キリストが罪人のためにいのちを捨てたことに、神の愛とキリストの愛とが重層的に現れるのである（ロマ8:34-35, 39; ガラ2:20; さらに、ロマ5:6-8を参照）²⁶。

ギリシア・ローマ世界には、無私の愛の極致として祖国や愛する者や友のために命を捨てることを称揚する伝統があった。プラトンは対話篇の中で、他の者たちが救われるために自らの死を引き受けることは賞賛に値する徳行であると語る（『メネクセノス』237a）。また、彼はギリシア悲劇に描かれている夫の身代わりとして命を捨てたアルケステイスの例を挙げて（エウリピデス『アルケステイス』290以下; 630以下）、相手のために命を捨てる者は愛する者以外にはないとしている（プラトン『饗宴』179b-180a）。アリストテレスは、善き人は友や祖国のために命を捨てることも辞さないとしている（『ニコマコス倫理学』1169a）。他方、ディオゲネス・ラエルティオスによれば、哲学者のエピクロスも、賢者は時として友のために死ぬことがあると述べている（ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』1.1.121b）²⁷。ストア派哲学者のエピクテトスは、友のために苦しみ、死ぬ覚悟を持つことを勧めている（エピクテトス『語録』2.7.3）。また、セネカは、友情の真価を友のために喜んで自己の命を捨てることに見ている（セネカ『書簡』I 9.10）。

パウロはこのような友愛の極地である自己犠牲的愛についての周辺世界の議論を踏まえていた²⁸。しかし、そうした場合において自分の命を捧げても良い対象は、愛すべき者であることが前提となっていることを彼は知っていた。ギリシア・ローマ世界の通念では、「義人のために死ぬ者は稀でも、愛すべき善人のために進んで死のうとする者はあるかも知れない」（ロマ5:7）²⁹。しかし、不道德な者を愛する必要もなければ、命を捧げる必要もない。従って、「不敬虔な者たちのために死んだ」（5:8）キリストの自己犠牲的行為は、友愛の理想では説明することが出来ない一方的愛の行為である。通常は、「不敬虔な者」は愛の対象ではなく、神の怒りの対象となるべき存在であるからである。

4. 信仰・希望・愛

人間相互間の愛について言えば、神の愛を受けている者として、キリスト者は他者を愛することを求められる（ロマ12:9-10; 13:8）。初期キリスト教の伝統では、愛は信仰や希望と並び、キリスト者の生きる基本姿勢を示す三つの徳の一つとして挙げられている（I コリ13:13; I テサ1:3; 5:8; エフェ1:15-18; コロ1:4-5; ヘブ10:22-24; 黙2:19; バルナバ1:4, 6を参照）。三つの徳が言及される順序は一定せず、I テサ1:3; 5:8; コロ1:4-5; バルナバ1:4, 6; 11:8では、信仰、愛、希望の順であるが、I コリ

25 Wischmeyer, "Traditionsgeschichtliche Untersuchung," 235-236; C. Breytenbach, "Interpretation des Todes Christi," in F.W. Horn (Hg.), *Paulus Handbuch* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2013) 321-331.

26 Wischmeyer, *Liebe*, 93-94; Söding, *Nächstenliebe*, 59-60; M. Konradt, "Liebesgebot und Christumimesis. Eine Skizze zur Pluralität neutestamentlicher Agapeethik," *JBT* 29 (2014) 80-81.

27 D. Konstan, *Friendship in the Classical World* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997) 109.

28 Cranfield, I 265 n. 1; Dunn, I 256; Jewett, 360; M. Wolter, *Der Brief an die Römer* (EKK VI/1; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlagsgesellschaft; Ostfildern: Patmos, 2014) I 330.

29 本稿における、新約聖書の引用は、特に断らない限り、B. & K. Aland et al. (Hg.), *Novum Testamentum Graece* (28. revidierte Aufl.; Stuttgart: Deutsche Bibelgesellschaft, 2012) の本文に基づいた筆者の私訳である。

13:13; ヘブ10:22-24; ポリュ・フィリ3:3では、信仰、希望、愛の順に、ヘブ6:11-12では、愛、希望、信仰の順になっている。これらの徳目の組み合わせはパウロ以前の教会の伝承に遡り、迫害その他の困難に直面しながら、信仰生活を続け、共同体を維持することを課題としていた初期のキリスト教徒の間に広まっていたと推測される³⁰。しかし、書かれた文章の中で定型句として用いたのはパウロ書簡が最初である³¹。このような徳目の形成の宗教史的背景としては、ヘレニズム・ユダヤ教が考えられ、知3:4, 9には希望と真理と愛の組み合わせが、シラ24:18には愛と畏れと知識と希望の組み合わせが、IVマカ17:2-4には信仰と希望と忍耐の組み合わせが見られる³²。

希望はキリストの死と復活の故に終末時の救いを信じることを内容としており、信仰の未来的側面を表している。Iテサロニケ書の執筆目的は、迫害下にあるテサロニケの信徒達を励ますと共に（Iテサ1:6-10; 2:1-4）、キリストの来臨前にこの世を去った者が出た事態の中で、終末時の死者の復活の希望を語って信徒達を慰めることにあった（4:13-18; 5:1-11）。初期のキリスト教徒達は、終末以前の時にあって様々な周辺世界との軋轢や迫害や苦難に直面していた。希望は来たらんとする将来の救いに向けられており、未だ実現してはいない。従って、未来に対して希望を持つことは現在において忍耐することを内包していた（ロマ5:3-4; Iテサ1:3; 黙2:2を参照）。パウロはロマ5:1-5において、キリストの死によって義とされた者が、信仰を通しての神との平和に導かれ、終末時に神の栄光に与る希望を与えられて、現在の苦難を忍耐と練達を持って耐えていることを指摘している。彼はここで義認論の展開としてキリスト者の希望を語っている。希望が失望に終わることがない保証は、聖霊によって心に注がれている神の愛である（ロマ5:6）。

Iテサ1:3においてパウロは、書簡導入部の感謝の祈りの中で、受信人たるテサロニケ人達の「信仰の業と愛の労苦と私たちの主イエス・キリストの希望の忍耐」を思い起こし、神に感謝している。書簡後半の勧告部分に置かれたIテサ5:8において、彼は比喩的表現を用いて、世界に働く悪の力に抗する霊的武器として、「信仰と愛の胸当てと救いの希望の冑」を装着するように勧めている（イザ59:17を参照）。信仰と愛と希望の組み合わせは既知の標語として用いられているので、パウロはその相互間の関係について論じることをしていないが、論理的な関係からすると、キリストを通して神を信じる信仰が基本にあり、その働きとして愛と希望が成立すると考えられる。パウロはガラ5:6において「信仰」という言葉の前に「愛を通して働く」という内容規定を加えていることが注目される。愛は実践的性格を持っており、信徒の倫理的生活を導く原動力として（ガラ5:13-14; ロマ13: 8-10）、具体的な働きを生み出す（Iテサ1:3「愛の労苦」を参照）。「愛を通して働く信仰」とは、愛が人間の内的思いに尽きることなく、キリストを信じる信仰（ガラ2:24）の外的表現として、信徒の生活の中に表われてくることを示している³³。

30 G. Theissen, "Glaube, Hoffnung, Liebe. Eine Formel, die zu denken gibt," *JBT* 29 (2014) 149-159.

31 Wischmeyer, "Untersuchung," 222-226; idem., *Liebe als Agape* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2015) 88-91; T. Söding, *Die Trias Glaube, Hoffnung, Liebe bei Paulus. Eine exegetische Studie* (SBS150; Stuttgart: KBW, 1992) 63; F. Weiss, "Glaube, Liebe, Hoffnung. Zu der Trias bei Paulus," *ZNW* 84 (1993) 196-217.

32 Theissen, 151; Wischmeyer, "Untersuchung," 226-230; H. Conzelmann, *Der erste Brief an die Korinther* (KEK V; 2. überarbeitete & ergänzte Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1981) 282を参照。

I コリント書13章においては、パウロは愛を擬人化して賞賛する言葉を重ねた後に三つの徳に言及し、愛が信仰や希望に優るものであるとしている（I コリ13:1-13）³⁴。それは、書簡の受信人であるコリント教会に生じた様々な問題の根底に信徒間の愛の欠如があると、パウロが考え、愛の重要性を強調する必要を感じていたからである³⁵。

パウロはキリスト者の自由を強調する。パウロが考える自由とは、律法からの自由である（ロマ7:3; II コリ3:17; ガラ2:4; 5:1, 13）³⁶。キリスト者に自由をもたらしたのは、キリストの派遣と霊の付与（ガラ4:6）、さらには、キリストの十字架であった（3:13）。従って、自由はキリスト者にとってはキリストによって与えられた恵みの賜物であり（5:4）、倫理的行動を考える際の出発点である（ガラ5:13; I コリ9:1, 13）。信徒達はこの自由のもとで、放逸に陥るのではなく、「愛を通して互いに仕え合う」ことが求められている（ガラ5:13）。愛の本質は自発性にあり、義務や強制の下に愛は成立しないので、自由と愛は表裏一体であると言える³⁷。律法から自由にされた者が、自発的に隣人への愛に生きる時に、結果として、律法の要求を充たす事態が生じる³⁸。隣人愛の律法の実践は、旧約聖書の律法全体の成就をもたらすのである（ガラ5:14を参照）。

5. 隣人愛と愛敵

隣人愛

パウロは初期キリスト教の伝統に一致して（マコ12:31-34並行を参照）、旧約聖書の隣人愛の規定を（レビ19:18）、他者を愛することを勧める根拠として援用している³⁹。十戒をはじめとする律法の倫理的要求は結局のところ隣人愛の実践ということに尽き（ロマ13:9; ガラ5:14）、愛は律法を成就するのである（ロマ13: 8-10; ガラ5:13-14）。しかし、罪人である人間が如何にして他者を愛することが出来るのかが問題となる。パウロの神学的思考によれば、人間が隣人を自分のように愛することが出来るのは、罪人のために死んだ御子キリストを通して表された神の愛を受けることによってである（ロマ5:8）。人間の愛は神の愛の基盤において成立し、実行可能なものとなる。神の愛は聖霊を通して人間の心に注がれており（5:5）、何事も人間をキリストの愛から離すことは出来ない（8:39）。

33 原口尚彰『ガラテヤ人の手紙』新教出版社、2004年、208頁；M. Wolter, "Liebe," in F.W. Horn (Hg.), *Paulus Handbuch* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2013) 450を参照。

34 I コリント12-14章の文脈における愛の讃歌の修辭的機能については、C. Faucant, "Die Funktion des Lobs auf die Liebe (1Kor 13) im Kontext," *JBT* 29 (2014) 171-185を参照。

35 Theissen, 161-165.

36 Bauer-Aland, 505; Schlier, 164; K. Niederwimmer, *EWNT* I 1052-58; V. Furnish, *The Love Command in the New Testament* (Nashville, TN: Abingdon, 1972) 96-102; F.S. Jones, "Freiheit" in *den Briefen des Apostels Paulus* (Göttingen: V & R, 1987) 96-102; S. Vollenweider, *Freiheit als neue Schöpfung* (Göttingen: V & R, 1989) 285-321.尚、パウロは他の文脈では、罪の支配からの自由（ロマ6:18; I コリ15:56）、死の支配からの自由（ロマ5:21; 7:9-11）についても語っている。

37 Söding, *Nächstenliebe*, 263-268に賛成。

38 Spicq, II 40を参照。

39 但し、共観福音書とは異なり、パウロは隣人愛の戒め（レビ19:8）を神への愛への戒め（申6:4）と組み合わせず引用していない。パウロはここで共観福音書とは別の伝承に依拠しているのであろう。

旧約聖書のレビ記19章の文脈では、隣人愛の戒め（レビ19:18b）は、兄弟を憎まないことや（19:17）、復讐せず、民族同胞を恨まないこと（19:18a）と一体をなしており、隣人愛の対象となる隣人（*עַמִּי*）の範囲はイスラエルの民族共同体の成員間に限定されている⁴⁰。尤も、より後期の伝承は、この戒めの適用範囲をイスラエルで生活する寄留者（*גֵּר*）まで拡張している（レビ19:34；申10:18）⁴¹。パウロは「兄弟」を民族同胞ではなく、キリストを信じる信徒であると理解したので、レビ19:18bの隣人愛の戒めも民族共同体ではなく、信仰共同体である教会に向けられていると理解した⁴²。

パウロと同時代の古代ユダヤ教による旧約聖書の隣人愛の規定の解釈について言えば、この規定は必ずしも頻繁に引用されず、ユダヤ教の律法理解に中心的役割を果たしているとは言えない⁴³。しかし、一部の文書では大切な戒めとして倫理的勧告に援用されている。例えば、『十二族長の遺訓』は、肉親の兄弟間の和と相互の愛を勧めると共に（ルベン遺6:9；シメオン遺4:4；ガド遺4:2-3）、隣人を愛することを強調している。この文書によればヤコブの息子たる十二族長達は、主なる神と隣人を愛することを勧め（イッサカル遺5:2）、隣人に真実を尽くし（ルベン遺6:9；ダン5:2）、隣人同士愛し合うことを勧め（ガド遺4:3；6:1, 3, 9）⁴⁴。隣人愛を同胞愛と解釈し、強く推奨する傾向は、ヨベル書にも確認出来る（ヨベ7:20；20:2；36:4, 8）⁴⁵。

他方、イッサカル遺7:6は、「私は主とすべての人を心を尽くして愛した」と述べ、隣人愛を民族の枠を越えて拡張し、一般化する方向を示している。同様に、シラ13:15は、「生きるものはすべてその同類を愛し、人間もその隣人を愛する」と述べて、隣人愛をより普遍的な人間愛の文脈で解釈する方向を示している⁴⁶。ここでは、同胞愛の対象が民族共同体の構成員から人類全体に拡張されている。

注目されるのは、エッセネ派に属するクムラン教団の場合で、『宗規要覧』8.2は教団の構成員を兄弟と呼び、愛し合うことを勧めている。さらに、『ダマスコ文書』6.20-21は旧約聖書の隣人愛の戒め（レビ19:18）を再解釈して、クムラン共同体に適用し、兄弟相互間の愛の根拠としている。兄弟愛として隣人愛の戒めを宗教共同体の構成員間の愛と解釈することにおいて、パウロの解釈はクムラン教団の解釈と並行する。しかし、クムラン教団はユダヤ教の一分派であり、異邦人を構成員として含んでいない。彼らにとっての「兄弟」とは、ユダヤ人社会の中で特殊な律法解釈を共有する少数の排他的な仲間のことであった。クムラン教団は、兄弟愛を勧める一方で、共同体外の悪しき者達である「闇の子ら」を憎

40 J. Milgrom, *Leviticus 17-22* (AB3B; New York: Doubleday, 2000) 1654; A. Nissen, *Gott und der Nächste im antiken Judentum. Untersuchungen zum Doppelgebot der Liebe* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 1971) 284-285; H.-P. Mathys, *Liebe deinen Nächsten wie dich selbst. Untersuchung zum alttestamentlichen Gebot der Nächstenliebe* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1986) 29-34; T. Söding, *Das Liebesgebot bei Paulus* (Münster: Aschendorff, 1995) 48; Wischmeyer, *Liebe*, 25-27; A. Sühle, "Wer ist mein Nächster?," *JBT* 29 (2014) 58-59; 辻学『隣人愛のはじまり』新教出版社、2010年、48-52頁を参照。

41 Milgrom, 1654; Söding, 48-49; Mathys, 40-45; Sühle, 59-60; 辻、50頁を参照。

42 Konradt, 90; Söding, *Nächstenliebe*, 289-290を参照。

43 O. Wischmeyer, "Das Gebot der Nächstenliebe bei Paulus," *BZ* 30 (1986) 162-170; idem., *Liebe*, 21を参照。

44 Söding, *Nächstenliebe*, 82-85を参照。

45 Ibid., 85-87を参照。

46 Wischmeyer, *Liebe*, 164.

むことを勧めているのである（『宗規要覧（1QS）』1:3-5, 9; 2:24; 5:4, 25; 8:2; 9:13, 21; 10:26）⁴⁷。

これに対して、パウロが前提にしている教会は異邦人信徒とユダヤ人信徒の両方を含んでおり、民族の壁を乗り越えていた（Ⅰコリ12:13; ガラ3:28）。また、パウロ書簡の受信人である信徒達は、圧倒的多数の異邦人の中に生きており、教会共同体内で愛し合うことと共に、共同体の外にいる人々をも愛することが求められていた（Ⅰテサ3:12）⁴⁸。パウロの隣人愛解釈は排他的な傾向を持たず、開かれた性格を維持していた点で、イッサカル遺7:6やシラ13:15が示す普遍主義的な傾向と接点を持っている。

愛敵

隣人愛は愛する主体の側の心的姿勢に注目しており、愛される側がそれにどのように応答するかは必ずしも問題にしない。愛された側がそれに愛をもって応えることもあれば、そうでないこともある。敵意を持っている相手を受愛することすら可能性としては存在する（ロマ12:14）。共観福音書伝承に保存されているイエスの愛敵の教えにおいては、愛の対象は、互いに愛し合う共同体内に限定されず、敵対する人々にも向けられている（マタ5:43-48; ルカ6:27-36）。

パウロはロマ13:9-21において、「愛は偽りであってはならない。悪を嫌悪し、善に執着しなさい。互いに兄弟愛をもって慈しみ、尊敬をもって互いを高いものとしなさい。熱心さにもとることなく、霊において燃え、主に仕えなさい。希望によって喜び、苦難を忍び、祈りに専心しなさい。聖徒達の足りないところを分かち合い、旅人をもてなすことを追い求めなさい。迫害する者を祝福しなさい。祝福するのであって、呪ってはならない。喜ぶ者達と共に喜び、泣く者達と共に泣きなさい。互いに一つのことを思いなさい。奢ったことを思わず、身分の低い人々と交わりなさい。自ら賢いと自惚れる者になってはならない。誰に対しても悪に対して悪を報いてはならない。すべての人々の前に良いことを配慮し、もしあなた方に可能ならば、すべての人々と平和に過ごしなさい。愛する者達よ、自ら復讐することなく、怒りに場所を与えなさい。書かれている通り、『復讐は私に属し、私が復讐する』と主は言われる。むしろ、もし敵が飢えていれば食べさせ、喉が渴いていれば、飲ませなさい。このことを行うことによって、その頭に燃える炭が積まれることになる。悪に負けるのではなく、善によって悪に勝ちなさい」と述べる。冒頭の「愛は偽りであってはならない」（12:9）という文章がこの部分を貫く視角を提供しており（Ⅱコリ6:6を参照）、それに続く様々な倫理的勧告の言葉は（ロマ12:10-21）、偽りのない愛に導かれた者が社会生活の中で取るべき具体的な行動を例示している。これらの勧告の一部は、キリスト教徒相互の関係について語っているが（12:9-13）、他の部分は異教徒を含むより広い範囲の人々との関係一般に妥当する勧めとなっている（12:14-20）。特に注目されるのは、「迫害する者を祝福しなさい。祝福するのであって、呪ってはならない」という勧めである（12:15）。この文章の最初の部分は、イエスの愛敵の教えを伝える共観福音書伝承や（ルカ6:27b-28「あなた方の敵を愛しなさい。あなた方を憎む者達に良い仕打ちをしなさい。あなた方を呪う者を祝福し、あなた方を憎む者達のために祈りなさい」；さらに、マタ5:44も参照）、使徒教父文書を思い起こさせる（ディダケー1:3「あなた方を呪う者達を祝

47 Söding, *Nächstenliebe*, 90-93を参照。

48 Spicq, II 111-112; Furnish, 102; Söding, *Nächstenliebe*, 245-247, 277, 281-282, 289.

福し、あなた方の敵のために祈りなさい」を参照)。パウロはイエスの愛敵の教えの並行伝承を引用しているのであろう⁴⁹。応報の原理や相互性の原理を越えた愛敵の教えは、イエス特有の教えであり、他には見られない初期キリスト教のエートスを形成していた（ルカ6:27b-28; マタ5:44; デイダケー1:3を参照）。

「迫害する者を祝福する」ことは、一方では、愛の対象を自分を愛してくれる可能性がある家族や仲間だけではなく、自分たちの好意を持たず、積極的に敵対行動を取る人々に対しても広げることを意味する。このことは、裁きは神に委ねて敵対行動に対して報復せず、悪に対して悪を報いないことによって裏付けられる（ロマ12:19-20）。そのことを倫理的な視点から評価すると、「善によって悪に勝つこと」に他ならないのである（12:21）。

6. 兄弟愛と友愛

信徒相互の愛としての兄弟愛

パウロは倫理的勧告の一環として、信徒相互の愛や（ロマ13:8; ガラ5:13; Iテサ3:12; 4:9）、兄弟愛（ロマ12:10; Iテサ4:9）を勧める言葉を語っている。さらに、Iテサ4:9において彼は信徒間の兄弟愛に言及し、信徒達がそうすべく神によって直接教えられていると述べる⁵⁰。他方、ロマ13:8-9において信徒相互の愛を勧めるパウロの発言は、旧約聖書の隣人愛の規定（レビ19:18）を再解釈して提示する文脈においてなされており（ロマ13:9; ガラ5:14を参照）、キリスト教共同体に属する信徒間の愛を隣人愛の一つの実現形態として捉えていることを示している⁵¹。ガラテヤ書においても、パウロは信徒達が「愛によって互いに仕える」ための根拠として、隣人愛の規定を援用している（ガラ5:13-14）。パウロは「兄弟」を民族同胞ではなく、キリストを信じる信徒であると理解したので、レビ19:18bの隣人愛の戒めも民族共同体ではなく、信仰共同体である教会に向けられていると理解した。但し、パウロは「お互いの愛」と共に「すべての人への愛」も勧めており（Iテサ3:12）、隣人愛は「兄弟」である信徒に向けられるだけではなく、信仰共同体の外の人々にも及ぼすことが出来ると考えていた⁵²。

信徒間の愛は相互性を持っており、互いに愛し合うことを前提としている（ロマ12:10; 13:8; ガラ5:13; Iテサ3:12; 4:9）。相互に愛し合う共同体に属する者として、信徒は互いのことを思いやり、尊重し合って、互いに裁くことをせず躓きを与えないことが求められる（ロマ14:1-23）。相互性は周辺世界においては友愛の重要な構成要素と理解されていた（アリストテレス『ニコマコス倫理学』1156a; 1157a; 1166aを参照）⁵³。パウロが求める信徒間の相互の愛は、周辺世界の基準から言えば友愛の条件を

49 Dunn, II 745; Jewett, 765-766を参照。

50 Spicq, II 18-19はこの点を強調する。

51 Wischmeyer, "Nächstenliebe," 186; idem., *Liebe*, 39-40; Jewett, 802-813; Söding, *Nächstenliebe*, 267を参照。

52 Furnish, 102, 109; M. Wolter, "Liebe," in F.W. Horn (Hg.), *Paulus Handbuch* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2013) 450-451.

53 R.F. Hock, "Jesus, the Beloved Disciple and Greco-Roman Friendship Conventions," in *Christian Origins and Greco-Roman Culture (Early Christianity in its Hellenistic Context Vol. I)*; eds. S.E. Porter/A.W. Pitts; Leiden: Brill, 2013) 202-203; B. Fiore, S.J., "The Theory and Practice of Friendship in Cicero," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J.T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 60-63.

十分に充たしていると考えられる。しかし、パウロは信徒相互の愛を友愛ではなくむしろ兄弟愛であるとしている（ロマ12:10；Ⅰテサ4:9）⁵⁴。初代教会の習慣に従って、パウロは教会の構成員である信徒たちをアデルフォス（ἀδελφός 兄弟）（ロマ1:13；7:1, 4；8:12, 29；9:3；〔2回〕；14:10, 13, 21；15:14, 30；Ⅰコリ1:1, 10, 11, 26；2:1；3:1；Ⅱコリ1:1, 8；2:13；8:1, 18；ガラ1:2, 11；4:12, 28, 31；フィリ1:12, 14；2:25；Ⅰテサ1:4；2:1；フィレ1:1, 7, 16他多数）、或いは、アデルフェー（ἀδελφή 姉妹）（ロマ16:1, 15；Ⅰコリ7:15；9:5；フィレ1:2）と呼ぶ。信徒は洗礼を受けて、神の子たる地位を与えられ、神をアバ（父よ）と呼ぶことが許される（ロマ8:15；ガラ4:6）。キリスト教共同体の構成員にとり、神は父であり（ロマ1:6；Ⅰコリ1:3；8:6；ガラ1:1, 3, 4；Ⅰテサ1:3；3:11他多数）、自らは神の子である。信徒同士は、神の子たる兄弟姉妹であるとされるので、信徒相互間の愛を兄弟姉妹間の愛と理解するのは不自然なことではない。信仰に基づく共同体の構成員間の愛情を兄弟愛と呼ぶ用法は、初期キリスト教に固有なものであった⁵⁵。

意見の一致と友愛と兄弟愛

フィリ1:27-28aにおいてパウロは、キリスト教に対して敵対する者が多く、福音のために闘うことを余儀なくされるような紀元一世紀中葉のフィリピの困難な状況の中で、パウロはフィリピ教会の信徒達に対して、互いに心を一にしてキリストの福音のために一致協力して闘うように勧めた。信徒達に求められているのは、福音のために闘う战友としての連帯を確認することであった。尚、フィリ4:2においてパウロは、エウオディアとシンティケという二人の指導的な女性伝道者に対して、「主にあって同じ思いを持つ」ように勧めている。彼らはフィリピ教会の他の指導的な構成員と共にパウロのフィリピ宣教に協力し、福音のために共に闘った人々であったが（4:3）、宣教に関する考え方の相違による両者間の対立があり、和解と一致に努める必要があったのであると推測される。

他方、フィリ2:1-4においてパウロは、「もし、誰かがキリストにおける慰め、愛の励まし、霊の交わりを持ち、共感と憐れみを持っているならば、あなたがたは同じことを思い、同じ愛を抱き、心を一にして、一つのことを考えて、私の喜びを満たすようにしなさい。党派心や虚栄心に従うのではなく、遜って互いを自分よりも高い者と見做し、各々が自分自身のことではなく、他人のことを追い求めるようにしなさい」と述べている。ギリシア・ローマ世界の友人論において、友とは価値観を共有し、一致した意見を抱く者であるとされていた（アリストテレス『ニコマコス倫理学』1167a；キケロ『ラエリウス・友情について』vi. 20；フィロン『神のものの相続人』83；『十戒各論』Ⅰ70；『徳論』35）。パウロがフィ

54 Jewett, 760-761; A.J. Malherbe, *Paul and the Thessalonians* (Minneapolis: Fortress, 1989) 48-51; idem., *Paul and the Popular Philosophers* (Minneapolis: Fortress, 1989) 63; idem., *The Letters to the Thessalonians* (AB32B; New York: Doubleday, 2000) 243; A.C. Mitchell, "Greet the Friends by Name": New Testament Evidence for the Greco-Roman *Topos* on Friendship," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J.T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 227; H.J. Klauck, "Kirche als Freundesgemeinschaft? Auf der Spurensuche im Neuen Testament," *MTZ* 42 (1991) 10-13; K. Schäfer, *Gemeinde als Bruderschaft* (Frankfurt a.M.: P. Lang, 1990) 160-162を参照。

55 Wolter, "Liebe," 451.

リビ教会の信徒たちに期待したのは、キリストへの信仰と愛においてひとつとなり、考えにおいても一致することである。同じ思いを抱いた教会の姿は、周辺世界の理解に従えば、友情によって結ばれた共同体と捉えることも可能である⁵⁶。それにも拘わらず、パウロがギリシア的な友愛に立つ共同体としてキリスト教共同体を描くことをしないのは意図的であり、周辺世界に存在する人間集団とキリストへの信仰に立つ共同体との違いを強調するためであったと推測される。共同体の成員は、初期キリスト教の慣例に従って互いに「兄弟（姉妹）」と呼び合い、共同体は家族に擬制されていた（フィリ1:12, 14; 2:25; 3:1, 13, 17; 4:1, 8, 21; ポリュ3:1)⁵⁷。友人であるからというよりも神の家族の成員として、彼らはますます愛のうちに歩むことが求められ（フィリ1:9, 16; 2:2）、霊の交わりのうちに互いに慰め合うこと（2:1）、思いを一つにすることや、遜って他を尊重することが勧められたのであった（2:1-4; 4:2-3）。そこには、友愛の主題が兄弟愛の主題に吸収される現象が認められる。

真実を語る愛

ガラ4:12-16においてパウロは、ガラテヤ人達の関係において親しかった過去と、疎遠になり、敵対している現在とを対照しながら、再び、親しい関係を回復するように情熱的な呼び掛けを行っている。パウロの語り方は、ヘレニズム修辞学が採り上げる友愛と（アリストテレス『弁論術』1380b-1381b; クウインティリアヌス『弁論家の教育』6.2.17-19）敵意・憎しみ（アリストテレス『弁論術』1382a）の主題に期せずして即応している⁵⁸。

パウロが「肉の弱さにために」ガラテヤ伝道に従事するに到った具体的事情何かということは、史料の不足のためにはっきりとは分からない。「肉の弱さ」とは何らかの病気であったと考えられるが、この病気が果たして、パウロがⅡコリント書で言及する「肉のとげ」（Ⅱコリ12:7）と同一であるかどうかは分からない。「私の肉においてあなた方の試練となること」（14節）は、文脈上、パウロの「肉の弱さ」を指していることは明らかである。古代においては病気や障害が悪霊の憑依によるものと考えられたので（マコ7:26, 29; マタ9:32-34を参照）、病を負っていることは神の使者として御言葉を語る使徒としての正統性を疑われる危険があった。ガラテヤ人達はこのような困難にもかかわらず、パウロを軽蔑して退けることをせず、キリストの福音の宣教者として受け入れ、その語る言葉によって回心したのだった（ガラ3:1-5を参照）。「神の使いであるかのように、キリストであるかのように受け入れた」という表現は、宣教者のパウロが最大級の歓迎を受けたことを示す表現である。こうして、ガラテヤ人達

56 K.L. Barry, "The Function of Friendship Language in Philippians 4: 10-20," in *Greco-Roman Friendship, Flattery, and Frankness of Speech: Studies on Friendship in the New Testament World* (ed. J.T. Fitzgerald; Leiden: Brill, 1996) 107-124; J.T. Fitzgerald, "Philippians in the Light of Some Ancient Discussions of Friendship," in *ibid.*, 144-156; *idem*, "Paul and Friendship," in J.P. Sampley (ed.), *Paul in the Greco-Roman World* (Harrisburg: Trinity Press International, 2003) 332; A.C. Mitchell, "'Greet the Friends by Name': New Testament Evidence for the Greco-Roman *Topos* on Friendship," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J.T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 233-234を参照。

57 T.J. Burke, *Family Matters: A Socio-Historical Study of Kinship Metaphors in 1 Thessalonians* (JSNTSup 247; London: T & T Clark, 2003) を参照。

58 J.L. Martin, *Galatians* (AB33A; New York: Doubleday, 1998) 189-193.

にとって試練となるべきことが、彼らの「幸い」となった(15節)。「どこにあなた方の幸いはあるのか」という文章は、読者に向けられた修辭的疑問文である(ロマ1:10; 3:2; Iコリ12:17, 19他)。かつての幸いな状態は、彼らが他の伝道者たちが語る「異なる福音」(1:6)の方を受け入れたために失われ、今は存在しない。これとは対照的に、ガラテヤ人達はかつて使徒に対して自己犠牲を厭わないほど思慕の念を抱いていた。「もし出来るなら、あなた方の目をえぐり出して私に与えたいとさえ思ったのだった」(15節)。目は人間の身体の器官の中で最も大切な部分であり(申32:10; 詩17[16]:8; ゼカ2:12; マタ5:29; パルナバ19:9)、自分の目を友に与えるとは極めて大きな自己犠牲である。友人のために犠牲を厭わないことは友情の重要な要素である(アリストテレス『ニコマコス倫理学』1169a. 20-34)⁵⁹。友人を救うために自分の目を捧げた話は、ギリシア・ローマ世界では美談としてよく知られていた(ルキアノス『トクサリス』40-41)⁶⁰。

パウロがここで言う「真理」とは(ガラ4:16)、「福音の真理」(2:5, 14)を指し、律法の遵守を含まないことが真理性の指標である。パウロが一貫して律法からの自由を(5:1, 13)真理の内容的核心として強調したために、ガラテヤ人達とパウロの間がこじれて敵対関係が生まれるに到った⁶¹。このような事態が生じた根本的原因は、パウロの論敵達が説いた、律法を守ること、特に割礼を受けること(ガラ5:2; 6:13)を含む福音をガラテヤ人達が真理として受け入れたことである(1:6-9; 5:7-8)。パウロが下す評価によれば、彼らの宣教活動は神に由来するものではなく(5:9)、その説く福音は真理性を欠いているのである(5:8)。

ギリシア・ローマ世界の友人論において真実を語ることは重要な要素とされていた。友愛は功利的な目的から相手の機嫌を取る追従とは異なっている。共和政期ローマの文人キケロによると、賢人ラエリウスは相手には耳の痛いことであっても真実を率直に語るのが真の友人であることを強調した(xxiv. 89-100)⁶²。帝政期ローマの倫理思想家のプルタルコスによると、真の友愛において重要なことは、徳と親密な交わりと有益である(「多くの友を持つことについて」『モラリア』94B)。友は慎重に考えて選ぶべきであり(94C-E)、権力者におもねる追従と、真実を語る友情とは区別されなければならない(「似て非なる友について—いかにして追従者と友人を見分けるか」『モラリア』48E-78E)⁶³。友は真実を語り、自らの判断を分かち合う(『モラリア』53B; さらに、ルキアノス『トクサリス』5も参照)。真の友とは、

59 D. Konstan, *Friendship in the Classical World* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997) 72-78; F.M. Schroeder, "Friendship in Aristotle and Some Peripatetic Philosophers," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J.T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 41-45; K. Scholtissek, "Eine größere Liebe als diese hat niemand, als wenn einer sein Leben hingibt für seine Freunde" (Joh 15, 13)," in *Die hellenistische Freundschaftsethik in Kontexte des Johannesevangelium* (hrsg. v. J. Frey/U. Schnelle; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2004) 420.

60 H.D. Betz, *Galatians* (Hermeneia; Philadelphia: Fortress, 1979) 220-237; Klauck, 8を参照。

61 原口尚彰『ガラテヤ人への手紙』新教出版社、2004年、190-191頁を参照。

62 B. Fiore, S.J., 65.

63 D. Konstan, *Friendship in the Classical World* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997) 98-100; E.N. O'Neil, "Plutarch on Friendship," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J.T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 109, 113-122.

常に賞賛してくれる者ではなく、良く吟味して、必要ならば、率直に意見をのべて過ちを正し、叱責してくれる者である（『モラリア』66A）⁶⁴。相手の感情を害する危険を冒すことを厭わず、ガラテヤ人達に対して率直に真理を語ったパウロの態度は、ギリシア・ローマ世界の倫理観に従えば、真の友人に相応しいものであった⁶⁵。

しかし、パウロはガラテヤ人達を友とは呼ばず、一貫して「兄弟達」と呼んでいる（ガラ1:11; 3:15; 5:13; 6:1, 18）。しかも、4:19において彼はガラテヤ人達を「子供達」と呼び、自らを産みの苦しみを再度経験することも厭わない親に喩えている（「私の子供達よ、あなた方のうちにキリストの形が出来るまで、私は再び産みの苦しみをしている。」）。パウロは初期キリスト教の慣例に従って、信徒たちを兄弟姉妹と呼び、キリスト教共同体を神の家族に喩えることを好むが、ここでは、ガラテヤ人達を信仰に導いた宣教者である自分と信徒達の関係を親子関係に喩えている。パウロは開拓伝道を行って信仰に導いた受信人達に対して自らを父親に喩えることもある一方（I コリ4:15; II コリ6:18; I テサ2:11）、自らを子を産み、養育する母親に喩えることもある（ガラ4:19; I テサ2:7）。ガラ4:19においては、福音宣教によって信徒を産み出すメタファーを背景に、誤った福音理解に陥った信徒達に有りの儘の真実を語って、彼らを福音の真理に引き戻すことを、彼は産みの苦しみを再度体験することに喩えている。パウロの意識において、誤った福音理解に陥った信徒たちに福音の真理を語ることは、友人として苦言を呈す義務の実行というよりも、親として出産・養育の責任を果たすことと理解されていたのである。

分かち合いとしての友愛と兄弟愛

パウロとフィリピ教会の間の関係はコリント教会やガラテヤ教会との関係とは対照的に、非常に良好であり、発信人であるパウロと受信人であるフィリピ人達との間には、共に福音に与る者、共に福音のために闘う者であることによる強い連帯感が存在した（フィリ1:27-30; 2:25; 3:4）。フィリピ教会は、パウロのテサロニケ宣教の際には再三経済的に支援し（4:14-16）、エルサレムの聖徒達のための献金運動にも、マケドニアの教会の一つとして積極的に参加していた（II コリ8:1-7; 9:1-5）。

フィリピ書執筆当時、パウロは滞在する伝道地のエフェソにおいて福音宣教に故に投獄されていた（フィリ1:12-13）。フィリピ人達は獄中のパウロの身を案じて、獄中のパウロに支援金を届けると共に、世話をするためにエパフロディトを遣わしていた（2:25; 4:10-20）。パウロはフィリピ人達に対して、支援金への感謝を述べると同時に、パウロの投獄の影響と獄中の自身の心境について手紙を書いて知らせる必要があったのである。

パウロとフィリピの信徒達の間には存在する親しさは、周辺世界が論じていた友人関係と通じるものがある⁶⁶。古典古代において、真の友人とは苦楽を共にする人であり（アリストテレス『弁論術』

64 Konstan, 105-108; K. Scholtissek, "Eine größere Liebe als diese hat niemand, als wenn einer sein Leben hingibt für seine Freunde" (Joh 15, 13)," in *Die hellenistische Freundschaftsethik in Kontexte des Johannesevangelium* (hrsg. v. J. Frey/U. Schnelle; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2004) 420.

65 Betz, 221; A.L. Mitchell, 227-229; H.J. Klauck, "Kirche als Freundesgemeinschaft? Auf der Spurensuche im Neuen Testament," *MTZ* 42 (1991) 8-9; J.P. Sampley, "Paul and Frank Speech," in idem. (ed.), *Paul in the Greco-Roman World* (Harrisburg: Trinity Press International, 2003) 299-304.

1381a)、友人関係において大切なことは相手に忠誠を尽くす信義、さらには、徳と真心であるとされていた(キケロ『ラエリウス・友情について』viii. 28-32; xxiv. 100)⁶⁷。友情の真価は逆境において問われるのであり、その時に、真の友と単なる追従者との違いが明らかになるとされていた(プルタルコス「似て非なる友について一いかにして追従者と友人を見分けるか」『モラリア』49D)⁶⁸。パウロとフィリピの信徒達の間には、ギリシア・ローマ世界が称揚していた喜びと苦難を分かち合う理想の友人関係が実現していたように見える。フィリピ人たちは、経済的に困窮したり、投獄されて苦境にあるときに、パウロを見捨てずに、物心両面で彼を支援したのであったのだから(4:10-20)、周辺世界の価値基準に従えば真の友人関係が成立していたことになる⁶⁹。

しかし、パウロは彼らのことを敢えて「親愛なる友」とは呼ばず、信仰の仲間として「兄弟達」(1:12; 3:1, 17; 4:1, 8)と呼び掛け、「愛する人達」(2:12; 4:1)、さらには、「私の喜び、冠である、愛する人達」(4:1)と呼んでいる。人間の自然に基づく友情ではなく、キリストの福音に基づく交わり(κοινωνία)が両者の間を結ぶ媒介項であったからである(1:5; 2:1; 3:10)。彼らは恵みに共に与ると共に(1:7)、霊の交わり(2:1)に与り、キリストのために苦しむことを共有していた(3:10; 4:14)。

兄弟愛という用語を用いることは、新約聖書全体からみると比較的稀であり、パウロ書簡の一部と(ロマ12:10; Iテサ4:9)、パウロの思想的影響が認められる公同書簡以外には認められない(ヘブ13:1; Iペト1:22; IIペト1:7 [2回])。ヘブル書13:1は、兄弟愛の重要性が受信人達の間によく知られていることを前提に、その具体的な実践として、旅人をもてなすことや、信仰故に獄中にある人々を思いやることを強調している。Iペト1:22は、神の言葉による新生のメタファーを前提に、キリスト教信仰に回心した者が、「真理に服従することによって魂を清め、偽善ではない兄弟愛を抱くに到っているのであるから、清い心で愛し合いなさい」と述べる。IIペト1:7は、キリスト教徒が守るべき倫理的徳目として、信仰、徳、知識、自制、忍耐、敬虔に加えて、兄弟愛と愛とを挙げている。これらの倫理的徳目は説明抜きに列挙されており、受信人達が一定の理解を持っていることが前提となっている。友愛のテーマに随所で触れながら信徒達に兄弟愛を勧めるパウロの言説は、初期キリスト教の信徒相互の愛を勧める倫理的勧告の一つとして位置付けることが出来ることが分かる。初期キリスト教において、信徒

66 J.T. Fitzgerald, "Philippians in the Light of Some Ancient Discussions of Friendship," in *Greco-Roman Friendship, Flattery, and Frankness of Speech: Studies on Friendship in the New Testament World* (ed. J.T. Fitzgerald; Leiden: Brill, 1996) 152-156.

67 R.F. Hock, "Jesus, the Beloved Disciple and Greco-Roman Friendship Conventions," in *Christian Origins and Greco-Roman Culture (Early Christianity in its Hellenistic Context Vol. I; eds. S.E. Porter/A.W. Pitts; Leiden: Brill, 2013) 202-203; B. Fiore, S.J., "The Theory and Practice of Friendship in Cicero," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J.T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 60-63; J.T. Fitzgerald, "Paul and Friendship," in J.P. Sampley (ed.), *Paul in the Greco-Roman World* (Harrisburg: Trinity Press International, 2003) 322-323.*

68 E.N. O'Neil, "Plutarch on Friendship," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J.T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 113-122.

69 J.T. Fitzgerald, "Philippians in the Light of Some Ancient Discussions of Friendship," in *ibid.*, 148-156; *idem*, "Paul and Friendship," in J.P. Sampley (ed.), *Paul in the Greco-Roman World* (Harrisburg: Trinity Press International, 2003) 332-333; Marshall, *Enmity in Corinth*, 157-164.

が相互に兄弟姉妹と呼び合う慣行は、非常に早い時期から確立しており、信徒達に「兄弟達よ」と呼び掛ける言葉遣いも（ロマ1:13; 10:1; 11:25; 12:1; ガラ1:11; 3:15; 5:13; フィリ1:12, 14; 2:25; 4:1, 8, 21他多数）、パウロ固有のものではない。パウロの貢献は、むしろ兄弟と呼ばれる信徒間に存在する相互の愛を「兄弟愛」として言語化し（ロマ12:10; Iテサ4:9）、信徒に対する倫理的勧告の一つの伝統を創り出したことにある（ヘブ13:1; Iペト1:22; IIペト1:7[2回]; 1クレ47:5; 48:1を参照）。彼の第二の貢献は、ギリシア・ローマ世界によく知られており、パウロ書簡の受信人であった信徒達も当然知っていると期待される友愛のトポスを適宜採り上げて、兄弟愛についての勧めの言葉に転用し、信徒相互の愛の具体的在り方を効果的に指し示したことにある。

7. まとめと展望

パウロの愛の教説の出発点は、人間が神や人を愛する行為ではなく、神が人間を愛する神の愛 (*ἀγάπη τοῦ θεοῦ*) である（ロマ5:5, 8; 8:35, 39; IIコリ5:14; ガラ2:20を参照）。神の愛は神が自らイニシアティブを取って、御子イエスをこの世に下し、死に渡したことに表れている（ロマ5:8; 8:39）。神の愛は自発的かつ自己犠牲的である。神の愛は、神の義や神の信実の主題と結び付いて、パウロの神学思想の中核を形成している。

神の愛への応答として、信徒達は神を愛し（ロマ8:28; Iコリ2:9; 8:3）、他者を愛することとなる（ロマ12:9-10; 13:8）。パウロは、人間の愛を論じる出発点を旧約聖書の隣人愛の規定に（レビ19:18）取りつつ、十戒をはじめとする律法の要求は隣人愛の実践によって成就することになると考えた（ロマ13:8-10; ガラ5:13-14）。パウロはキリスト教共同体に属する信徒達が互いに愛し合うことの大切さも倫理的勧告の中で強調している（ロマ13:8; ガラ5:13; Iテサ3:12; 4:9）。信徒が互いに愛し合うことも、隣人愛の教えの重要な実践形態の一つであると考えていた（ロマ13:8-10; ガラ5:13-14）。

信徒相互の関係は、意見の一致や、自己犠牲や、苦楽の分かち合いや、真実を語ることなど、ギリシア・ローマ世界の基準で言えば、友人関係に該当する。しかし、パウロは信徒間の精神的結び付きを友愛ではなく兄弟愛と表現している（ロマ12:10; Iテサ4:9）。通常は友人間に存在する親しい精神的結び付きと捉えられる事柄を、神の家族である信徒間の愛情として提示している。このことは偶然ではない。パウロはキリスト教共同体をギリシア的な友愛に基づく友人集団としてではなく、神によって召され、キリストの死に極まる神の愛によって立てられた家族的集団として提示しようとした。そこで、意見の一致や相互の思いやりや奉仕も、友情の実行ではなく、兄弟愛の実践と理解されることとなった（ロマ12:10; Iテサ4:9）。

他方、初期キリスト教が考える隣人愛は旧約・ユダヤ教とは異なり、広く人類一般に向けた愛を内容としており（ルカ10:25-37を参照）、パウロも愛の対象を同胞や同信の友に限定しておらず、彼の愛の教説は共同体の外の人々に対しても開かれていた（ロマ12:14-20を参照）。彼の信徒達への愛についての教えは、迫害の厳しい状況を踏まえて共同体内の結束を促し、互いに愛し合うことを強調しながら、迫害する者を愛し、彼らのために祈り（12:14-15）、自分たちに対して悪をなす者に対して悪を返すことをせず、善をもって報いることを勧めるのである（12:14-15）。パウロの愛の教説は状況性を踏まえながら普遍性を指向していると言える。

参考文献

1. 注解書

- Barrett, C.K. *The First Epistle to the Corinthians* (London: Black, 1968).
- Betz, H.D. *Galatians* (Hermeneia; Philadelphia: Fortress, 1979).
- Collins, R.F. *First Corinthians* (Sacra Pagina 7; Collegeville, MN: The Liturgical Press, 1999).
- Conzelmann, H. *Der erste Brief an die Korinther* (KEK V; 2. überarbeitete & ergänzte Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1981).
- Cranfield, C.E.B. *The Epistle to the Romans* (ICC; 2 vols; Edinburgh: T & T Clark, 1973-1979).
- Dunn, J.D.G. *Romans* (WBC 38AB; 2 vols; Dallas: Word Books, 1988).
- Fee, G.D. *The First Epistle to the Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1987).
- Fitzmyer, J.A. *Romans* (AB33; New York: Doubleday, 1993).
- Garland, D. *1 Corinthians* (Grand Rapids: Baker, 2003).
- 原口尚彰『ガラテヤ人への手紙』新教出版社、2004年
- Jewett, R. *Romans* (Hermeneia; Minneapolis: Fortress, 2007).
- Käsemann, E. *An die Römer* (HNT 8a; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1974).
- Klauck, H.J. *Der erste Brief an die Korinther* (2. Aufl.; Würzburg: Echter Verlag, 1987).
- Lang, F. *Die Briefe an die Korinther* (NTD 7; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1986).
- Lietzmann, H. *Der erste Brief an die Korinther I/II* (HNT 9; 5. Aufl.; Tübingen: J.C.B. Mohr, 1969).
- Lohse, E. *Der Brief an die Römer* (KEK VI/1; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 2003).
- Martin, J.L. *Galatians* (AB33A; New York: Doubleday, 1998).
- Merklein, H. *Der erste Brief an die Korinther* (OTKNT 7/1-2; 2 Bände.; Gütersloh: G. Mohn, 1992-2000).
- Milgrom, J. *Leviticus 17-22* (AB3B; New York: Doubleday, 2000).
- Robertson, A. and A. Plummer, *A Critical and Exegetical Commentary on the First Epistle to the Corinthians* (Edinburgh: T. & T. Clark, 1911).
- Schlier, H. *Der Römerbrief* (HTkNT VI; 3. Aufl.; Freiburg: Herder, 1987).
- Schrage, W. *Der erste Brief an die Korinther* (EKK VII/1-4; Zürich: Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1991-2012).
- Strobel, A. *Der erste Brief an die Korinther* (ZBK6.1; Zürich: Theologischer Verlag, 1989).
- Thiselton, A.C. *The First Epistle to the Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 2000).
- Wilckens, U. *Der Brief an die Römer* (EKK VI/1; 2. verbesserte Aufl.; Zürich: Benzinger; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1987).
- Witherington III, B. *Conflict & Community in Corinth: A Socio-Rhetorical Commentary on 1 and 2 Corinthians* (Grand Rapids: Eerdmans, 1995).
- Wolff, C. *Der erste Brief an die Korinther* (THKNT 7; Berlin: Evangelische Verlagsanstalt, 1996).
- Wolter, M. *Der Brief an die Römer* (EKK VI/1; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlagsgesellschaft; Ostfildern: Patmos, 2014).

2. 個別研究

- Barry, K.L. "The Function of Friendship Language in Philippians 4: 10-20," in *Greco-Roman Friendship, Flattery, and Frankness of Speech: Studies on Friendship in the New Testament World* (ed. J.T. Fitzgerald; Leiden: Brill, 1996) 107-124.
- Breytenbach, C. "Interpretation des Todes Christi," in F.W. Horn (Hg.), *Paulus Handbuch* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2013) 321-331.

- Bultmann, R. "Das christliche Gebot der Nächstenliebe," in *Glauben und Verstehen* (4 Bde; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1933-1965) I 229-244.
- Burke, T.J. *Family Matters: A Socio-Historical Study of Kinship Metaphors in 1 Thessalonians* (JSNTSup 247; London: T & T Clark, 2003).
- Butler, R.F. *The Meaning of agapao and phileo in the Greek New Testament* (Lawrence: Coronado, 1977).
- Dunn, J.D.G. *The Theology of Paul the Apostle* (Grand Rapids: Eerdmans, 1997).
- Focant, C. "Die Funktion des Lobs auf die Liebe (1Kor 13) im Kontext," *JBT* 29 (2014) 171-185.
- Fiore, S.J.B., "The Theory and Practice of Friendship in Cicero," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J.T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 60-63.
- Fitzgerald, J.T. "Philippians in the Light of Some Ancient Discussions of Friendship," in *Greco-Roman Friendship, Flattery, and Frankness of Speech: Studies on Friendship in the New Testament World* (ed. J.T. Fitzgerald; Leiden: Brill, 1996) 141-162.
- _____. "Paul and Friendship," in J.P. Sampley (ed.), *Paul in the Greco-Roman World* (Harrisburg: Trinity Press International, 2003) 319-343.
- Furnish, V. *The Love Command in the New Testament* (Nashville, TN: Abingdon, 1972).
- Hauck, F. "Die Freundschaft bei den Griechen und im neuen Testament," in *Festgabe für Theodor Zahn* (Leipzig: Deichert, 1928) 211-228.
- 原口尚彰『新約聖書神学概説』教文館、2009年
- Hock, R.F. "Jesus, the Beloved Disciple and Greco-Roman Friendship Conventions," in *Christian Origins and Greco-Roman Culture (Early Christianity in its Hellenistic Context Vol. I; eds. S.E. Porter/A.W. Pitts; Leiden: Brill, 2013)* 195-212.
- Horn, F.W. (Hg.). *Paulus Handbuch* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2013).
- Joy, R. *Le vocabulaire chrétien de l'amour est-il original? ἀγάπην et φιλεῖν dans le grec antique* (Bruxelles: ULB, 1968).
- Käsemann, E. "Gottesgerechtigkeit bei Paulus," in idem., *Exegetische Versuche und Besinnungen* (2. Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1965) II 181-193.
- Klauck, H.J. "Kirche als Freundesgemeinschaft? Auf der Spurensuche im Neuen Testament," *MTZ* 42 (1991) 1-14.
- Klumbies, P.-G. *Die Rede von Gott bei Paulus in ihrem zeitgeschichtlichen Kontext* (FRLANT 155; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1992).
- Konstan, D. *Friendship in the Classical World* (Cambridge: Cambridge University Press, 1997).
- Konradt, M. "Liebesgebot und Christusmimesis. Eine Skizze zur Pluralität neutestamentlicher Agapeethik," *JBT* 29 (2014) 65-98.
- Jones, F.S. *"Freiheit" in den Briefen des Apostels Paulus* (Göttingen: V & R, 1987).
- Lang, B. "Zur Entstehung des biblischen Monotheismus," *ThQ* 166 (1986) 135-142.
- Lindemann, A. "Die Rede von Gott in der paulinischen Theologie," ders., *Paulus, Apostel und Lehrer der Kirche* (Tübingen: Mohr, 1999).
- Malherbe, A.J. *Paul and the Thessalonians* (Minneapolis: Fortress, 1989).
- _____. *Paul and the Popular Philosophers* (Minneapolis: Fortress, 1989).
- Mathys, H.-P. *Liebe deinen Nächsten wie dich selbst. Untersuchung zum alttestamentlichen Gebot der Nächstenliebe* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1986).
- Mitchell, A.C. "Greet the Friends by Name: New Testament Evidence for the Greco-Roman *Topos* on Friendship," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J.T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars,

- 1997) 225-262.
- Nissen, A. *Gott und der Nächste im antiken Judentum. Untersuchungen zum Doppelgebot der Liebe* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 1971)
- O'Neil, E.N. "Plutarch on Friendship," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J.T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 105-122.
- Piper, J. *Love Your Enemies (A History of the Tradition and Interpretation of Its Uses): Jesus' Love Command in the Synoptic Gospels and the Early Christian Paraenesis* (Cambridge: Cambridge University Press, 1979).
- Rad, G. von. *Theologie des Alten Testaments* (2 Bände; München: Kaiser, 1960-1962) II 223-225, 240.
- Sampley, J.P. "Paul and Frank Speech," in idem. (ed.), *Paul in the Greco-Roman World* (Harrisburg: Trinity Press International, 2003) 293-318.
- Sauter, J. "Traditionsgeschichtliche Erwägungen zu den synoptischen und paulinischen Aussagen über Feindesliebe und Wiedervergeltungsverzicht," *ZNW* 76 (1985) 1-28.
- Schäfer, K. *Gemeinde als Bruderschaft* (Frankfurt a.M.: P. Lang, 1990).
- Scholtissek, K. "'Eine größere Liebe als diese hat niemand, als wenn einer sein Leben hingibt für seine Freunde' (Joh 15, 13)," in *Die hellenistische Freundschaftsethik in Kontexte des Johannesevangelium* (hrsg. v. J. Frey/U. Schnelle; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2004) 413-439.
- Schroeder, F.M. "Friendship in Aristotle and Some Peripatetic Philosophers," in *Greco-Roman Perspectives on Friendship* (SBLRBS 34; ed. J.T. Fitzgerald; Atlanta: Scholars, 1997) 35-58.
- Söding, T. *Das Liebesgebot bei Paulus* (Münster: Aschendorff, 1995).
- _____. "Gottesliebe bei Paulus," in idem., *Das Wort vom Kreuz* (WUNT 93; Tübingen: Mohr-Siebeck, 1977) 303-326.
- _____. *Die Trias Glaube, Hoffnung, Liebe bei Paulus. Eine exegetische Studie* (SBS150; Stuttgart: KBW, 1992).
- _____. *Nächstenliebe. Gottes Verheissung und Anspruch* (Freiburg i.B.: Herder, 2015).
- Spicq, C. *Agapè dans le Nouveau Testament. Analyse des textes*. 3 vols. Paris: Gabalda, 1958-1959. (= *Agape in the New Testament*. 3vols; Eugene, OR: Wipf & Stock, 2007).
- Stuhlmacher, P. *Gerechtigkeit Gottes bei Paulus* (2. Aufl.; FRLANT 87; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1966).
- Sühle, A. "Wer ist mein Nächster?," *JBT* 29 (2014) 58-59.
- G. Theissen, "Glaube, Hoffnung, Liebe. Eine Formel, die zu denken gibt," *JBT* 29 (2014) 149-169.
- 辻学『隣人愛のはじまり』新教出版社、2010年
- Vollenweider, S. *Freiheit als neue Schöpfung* (Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1989).
- Weiss, F. "Glaube, Liebe, Hoffnung. Zu der Trias bei Paulus," *ZNW* 84 (1993) 196-217.
- Wischmeyer, O. "Das Gebot der Nächstenliebe bei Paulus," *BZ* 30 (1986) 161-187.
- _____. "Traditionsgeschichtliche Untersuchung der paulinischen Aussagen über die Liebe (ἀγάπη)," *ZNW* 74 (1983) 222-236.
- _____. *Von Ben Sira zu Paulus: gesammelte Aufsätze zu Texten, Theologie und Hermeneutik des Frühjudentums und des Neuen Testaments* (WUNT 173; Tübingen: Mohr-Siebeck, 2004).
- _____. *Liebe als Agape* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2015).
- Wolter, M. "Liebe," in F.W. Horn (Hg.), *Paulus Handbuch* (Tübingen: Mohr-Siebeck, 2013) 449-452.
- Wright, N.T. *Paul and the Faithfulness of God* (4 Parts; Minneapolis: Fortress, 2013).
- Ziesler, J.A. *The Meaning of Righteousness in Paul* (Cambridge: Cambridge University Press, 1972).

(はらぐち・たかあき)

フェリス女学院大学国際交流学部教授